
女魔王と男の話

ナンクルナイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女魔王と男の話

【Nコード】

N3874BA

【作者名】

ナンクルナイザー

【あらすじ】

??とある世界があった。名前はない。

そこには三つの大陸があった。名前は割愛。

その大陸には、それぞれ『人間』『魔物』『準人』『その他』と分けられた動物が住んでいた。詳細は割愛。

それぞれの大陸には、それぞれ大きな国が一つずつあった。名前は勿論割愛。

数ある国のうちの一つ、その外れのとある村に、二人の兄妹が??関係無いので以下省略。

この物語は、そんな世界の『裏側』から始まる、一人の『魔王』と、その『部下』の物語？？

1話『目覚めの時』

むかしむかしのおはなしです。

この大陸には、『魔王』とよばれるおそろしい『化け物』がいました。

『魔王』が指を鳴らせば、たちまちのうちに空は裂け、大地は割れ、海は荒れるといわれていました。

そんな『魔王』を倒そうと、たくさんの国から『勇者』と呼ばれるひとたちがたちあがりました。

かれらはけっして、選ばれたとくべつなにんげんではありませんでした。

剣をふるえば鉄を切ることはできても、剣がなければわらを切ることもできません。

そんな、ごく普通のひとたちでした。

それでも彼らには、その心にひめた『勇気』があつたのです。おそろしい『魔王』にたちむかおうとする、強い『勇気』が。

そんな『勇者』の中に、ひとりのわかものがいました。

名前は『アンジエロ』。とおい異国の言葉で『神の使い』という意味をもつ名前です。

かれはけっして強くはありませんでした。

かれにあつたのは、『勇気』と、あるひとつの『秘密』だけ。

その『秘密』が何なのか、くわしく知るひとはいませんでした。

かれはたったひとりで『魔王』にいどみました。

かれが『魔王』にいどんでからしばらくたち、みんながかれはしん

この『世界』は、大きな三つの大陸と、その他の幾つもの島々によって成り立っている。

それぞれの大陸は、ほぼ均等な距離のある海を挟んで、ちょうど三角形を描くように位置している。

伝説では、三大陸のちょうど真ん中の海にも、もう一つ大陸はあったらしい。

しかし現在では、その海はいつでも荒れていて、入れば二度とは出られない『魔の海域』と呼ばれている。

そのせいで、伝説の真偽を確かめる事もできてはいない。

三つの大陸にはそれぞれ4種類の動物が住んでいて、大陸にはそれぞれ一つずつ大きな国がある。

4つの種類のうちの1つめは『人間』、2つめは『魔物』、3つめは『準人』、4つめは『それ以外』。

『人間』はいわずもがな。『魔物』は主に他の種族を襲う動物で、『準人』はちょうど『人間』と『魔物』の中間のような特徴を持ち、『それ以外』は文字通りの先程のどれにもあてはまらないもの。特に理由がない場合は基本的に最後のものを『動物』という。

これらの区分はあくまでも人間が決めたものであり、同じ種類だから生態も同じ、という訳ではない。

人間を襲わない魔物だっているし、人間を襲う『それ以外』だっている。

人間と見た目はまったく変わらない準人だっているし、魔物のような姿をした人間だっている。

4種類のそれぞれの数は、厳密には把握できていない。

おそらく、という仮定ではあるが、『それ以外』が一番多く、次い

で人間、その次に多いのが魔物、一番少ないのが準人だとするのが一般的だ。

生息する地域はそれぞれがどこにでもまんべんなく。

人間と準人と『それ以外』の生息域が重なることはあっても、魔物はどれとも重なることはない。

つまりは、魔物は共通の敵、という認識だ。

国の名前や数は割愛。ここではあまり関係無い。

そんな訳で。

このような地理で、このような種類の生物が、このように分布し、それぞれの生活を営む事によって、この世界は成り立っている???と、表向きはそうなっている。

大多数は知らない。

『世界』は本当はもっと広いということ。

三大陸の『外側』の海を越えた先に、三大陸どころかその間にある海を全て足した面積よりも、更に巨大な面積を持つ大陸があることを。

その大陸を埋め尽くすように魔物が生息しており、『皆が知っている世界』に住む魔物は、そこから迷いこんだ一部でしかないという事を。

人間は知らない。

『お伽噺』の中にしか存在しないとされる『魔王』が、その大陸に存在している事を?????

|||||

opening

世界を見つめる、1柱の神がいました。
神が見た世界は、混沌に包まれていました。
魔物は人を襲い、人は魔物に襲われて。
人は魔物を倒し、人は人を倒す。
それを見た神は、こう考えました。

「……どーしよーかなー……」

訂正。

何も考えていませんでした。

何も考えていなかった神は、必至に考え始めました。
そうしてしばらく時間が経ち、神は名案を思いつきました。

「そつだ、饅頭喰おう」

訂正。

何も思いつきませんでした。

饅頭を持ってきて、一つ食べながらも一度世界を見つめ直した神は、ふと気付きました。

「そついえば、もう三日は風呂に入っていないな……」

そつなのです。

神は終わらせても終わらせても回ってくる大量の仕事のせいで、風呂に入る時間すらなかったのです。

今はやっと仕事が一段落して、休憩を兼ねて世界をぼつっと見つめていたのです。

自分の体の臭いを嗅ぎ、顔を顰めた神はどこかに行ってしまいました。

しばらくすると、なにやら水のようなものが地面にしたたりおちるような音が聞こえてくるような。

その音に混じって、なにやら荒い息遣いのような音が聞こえてくるようなこないような。

ふと水の音のようなものが止んだと思ったら、なにやら「またお前か！いい加減にしろっ！」「モルスア！」という大きな声が、何か壊れるような音と一緒に聞こえてきました。

それからけっこう時間がたった後、神は戻って来ました。

なにやら不機嫌そうにベッドに飛び込んだかと思うと、俯せのまま、突然にへらと表情を崩しました。

あとなんか「まったく、どうしようもないやつめ……ふふっ………」とかなんとか聞こえてきました。

しばらくそんな感じでジタバタゴロゴロしていた神は、ふと仰向けになり、眩きました。

「……………寝るか」

神は、明日の激務に備えて、早めに睡眠する事にしました。

ちなみに神は、性別上、一応『女』に分類されていました。

ちなみに神は、人間で言うのならちょうど20歳ほどでした。

ちなみに神は、絶賛片思い中でした。記号で表すと『神(女)神(男)』みたいな感じで。

ちなみに『神(女)』は「またお前か」で、『神(男)』はお察しの通り『モルスア』でした。

|||||

……………え？

今のくだり、必要ありました？

|||||

0 . p r o l o g u e

はじまりは、なんだっただろう。

目を醒ますと、そこは見渡す限りの荒野で?????目の前に、人影があつた。

そうだ。

始まりは、確かこんな感じだった。

なにもない荒野に、ぽつんと人影が一つ。

目覚めたばかりの私は、まだそれをうすぼんやりとしか認識できておらず。

顔を顰めて問いかけてくる人影。
だが私には、その問いかけに答える事はできなかった。
なぜならば。

「変態がいるー！ー！ー！？」

「……………失敬な」

それは座り込んでいる私の目の前に、全裸で仁王立ちしている男なんて奇つ怪な光景を見たからであり。

それによって胸に込み上げ、体中に駆け上がった感情やらなにやらを、表現するのはいっぱいだったからだ。

そう、始まりは、荒野のど真ん中での全裸だった?????

||||||||||||||||||||

1. 『魔王』

ひとしきり思いの丈を叫んだ後。

息も荒く涙目で座り込む女性と、女性に背を向けた全裸の変態の姿が、荒野にはあった。

言わずもがな、女性は私で、変態は変態だ。……………変態は全裸だ。全裸だから変態だ。

「……………落ち着かれましたか？」

「……………なんだ、そのどこか呆れ気味な声色は」

悪いのはお前だろう。

あまりの出来事に、キャラじゃない悲鳴を上げてしまったじゃないか。

お前が全裸でこっちを見つめてくるから、取り乱してしまったんだろう。この変態め。

今ヤツは背を向けているので、なんとか落ち着く事はできたが……できれば視界に入れたくはない光景にはいまだ変わりない。

後ろ向きだろうが前向きだろうが、その……男の裸は、苦手だ。

と、いうか、だ。

なんで変態なんだお前は。……間違えた。なんで裸なんだお前は。

「いきなり訳の解らない事を叫んだかと思えば、人の事を変態だ、と言われれば、それは呆れるでしょう。むしろ普通は怒ります」

「何が訳の解らないだ。単純明快だろうが、この変態」

なんだその「怒らないだけでもありがたいと思え」とでも言いたげな台詞は。殴るぞ。

「……………では聞きましょう。いったいどこがどういう訳で、貴女様は

私の事を『変態』などと罵っているのでしょうか」

「そんなものは決まっている。お前が性別のことなる私の眼前で、恥ずかしげもなく全裸で突っ立っているからだ」

『見ず知らずの異性で他人の目の前で、全裸になっても変態扱いされない』世界があるのなら、是非教えていただきたいものだ。もしも存在するというならば、今後そこだけは絶対に訪れないようにする為にも。

「……………はぁ」

「んなっ?!溜息を吐いた!？」

そんな思いを込めて言った、当たり前の事を受けてもなお、目の前の変態は態度を改めないばかりか。溜息なんぞまで吐きおった。……………こいつ……………。

「溜息?今溜息を吐いたな貴様!」

「それはもう。この私でも溜息を吐きたくもなるというもの」

やれやれ、といわんばかりに両の掌を上、肩の辺りで留めて首を振る変態。

……………い、いいだろう……………ここは貴様の言い分を聞いてやるづ。

ただし私が納得できないものだったなら蹴り飛ばす。

「い、いいいいいい良いだろう！き、貴様の言い分を聞いてやるっ……！」

「……………では、お言葉ですが」

怒りに震える私の許しの声。

その声を受けてもなお、まったく動揺を感じさせない変態の声色。
そんな声色のまま、変態はこう告げた?????

「貴女様も一糸纏わぬ全裸を晒していらっしやるではありませんか」

「……………な???に?????」

そんな、衝撃的な言葉に。

私は菌類だか某死神漫画風な驚きの声を上げ、固まってしまった。
私が、裸?????そんな、馬鹿な事が?????

……………あ。

「私は貴女様も全裸でいらしたので、てっきりこれが常識なのだと判断しました。しかし当の貴女様が『全裸は変態の証である』と、そう仰るのならば、事実それはその通りなのでしょう」

「……………あ、ああ……………!!」

気付いてしまった。
どうやら、本当に。

今の私は、服を着ていない?????つまりは、男の言う通り全裸であるらしかった。

「ですが。ならば、です。貴女様の言葉が真実正しき事と言つなれば。なればこそ、私は貴女様に言わなくてはなりません」

「……………」

なるほど、ならば頷けよう。

幾度となく耳に届いたはずの言葉を聞いても、男が反省しなかった理由に。

いくら私が、全裸の男に向かって『変態』と叫ぼうとも。
常識を、正しき理をいくら述べようとも。

その言葉に重みはなく。決して、目の前の男に届く事はないのだ。

なぜなら私もまた、全裸へんたいだったのだから?????

「1Jの?????変態め」

「……………だ……………」

裸の私が蹴りを放つ所を目撃していた訳で……………それはつまりは、私の大事な?????

?????ダメだ、死にたい。

恥ずかしくて死にそうだ。というかいつそ死んで楽になりたいぐらいに恥ずかしい。

もうダメだ。お嫁にいけない。もし見られたとしたら、お嫁にいけない????!

ぐるぐるぐるぐると頭の中を駆け巡る色々な想像?????こうなったら責任をとって貰うしか……………いやそれだけは死んでもゴメンだ???等といった?????を、追い出そうとしたり、情けなくなったりしてついつい膝を抱えて座り込んでしまっていると。多分、5分ぐらい経ったときだろう。

「……………お顔をお上げ下さい?????服をお持ち致しました」

「……………」

声に従い、顔を上げると。

どこか申し訳なさそうに服を差し出してくる、変態の姿がそこにあった。

で。

それから私は服を受け取って。

サイズがピッタリだという事に薄ら寒い思いをしながらも、それを

身に付け。

身に付けると同時にあいつは声をかけてきて??冒頭にいたる、と。

そついう訳で。

私達二人は、めでたく変態を卒業したのであった。

「……………それにしても」

「……………なんだ」

「……………意外と、可愛い悲鳴をお上げに「そんなに飛びたいか？」
謹んで辞退させて頂きます」

背中合わせに座り込む私達は、しばらく黙り込んでいた。

理由は…………アレだ。察せ。私も自分のキャラを取り戻すのに精一杯
だったんだ。

だからアレは私のキャラではないのだ。不可抗力なのだ。私は本来
「ひきやあ」等と女々しい悲鳴は上げない??善なのだ。

だから忘れる、アレは忘れると言外の圧力を掛けながらからかいの
言葉に返答するとやつは大人しく謝罪した。それでいい。

……………しかし。

始めに目にしたモノがモノだったから???そういえば、あまり
大きくはなか……………いかん、はしたないぞ自分。忘れる、忘れる自分
!……………アレは、私の裸を目にしてもアレのままだったのか、
或いはヤツのアレはそれが限界だったというのか、どちらなのだろ
うな……………なんとなく、そう、なんとなくだ。後者であればいい
とふと思った。他意は無い。

「……今、何気に失礼な事を考えませんでしたか？」

「き、気のせいだろうっ!？」

「そこは普通、『何の事だ?』と返すべきだったでしょうに」

「うるさいっ!」

ええい、さつきから敬語の癖に毒を吐きおつてからに！
敬語ならばきつちりと全てを敬え！

………ん？敬語？

ふと、疑問に思った。

何故先程から、この男は初対面の私に敬語を使うのだろうか。
いや、初対面で敬語を使うことは何も不思議な事では無い。

だが、 magari なりにも……一方向的に悪いとしても、だ。
暴力を振るわれた奴が、振るった奴に対して、こつも恭しく接する
だろうか。

……すこしその態度が、敬っているとは言いがたい事には目を瞑る
として。

こいつには、私を敬わなければならぬ理由がある、という事か……
……?あるいは、単にこいつの癖や性格という考えも捨てきれないが
………。

そもそも、だ。何故私達はこんな所にいる？

文字通り身包み剥がされたと思えないような状態で、なにもな

い荒野に。

いや、まずそもそも話????私は一体、誰なのだ……?

……ううん……ああー……駄目だ。さっぱり解らない。

何一つとして、解ることがない。

ここがどこなのか、なぜここにいるのか。そして私が誰なのかさえも。

これは、所謂記憶喪失……というやつなのだろうか。

だとしたら何故……ああ、切りが無い。

自己に関する記憶が一切思い出せない。ある程度の知識は備わっている様だが……。

……はあ。しかたない。自分では何も解らないというのであれば、他人に聞いてみるとしようではないか。

己が答えを持っていなければ、他から持ってくれば良いのだ。うむ、道理だな。

おあつらえむきに、同じ状況の筈なのにどこか余裕すら感じさせるヤツがいる事だし……な。

「あー………と、ところで、ここはどこなんだろうな」

「やっとその質問ですか………ここは、そうですね。『裏界』^{りかい}とでも呼びましょうか」

「……『裏界』?」

なんと声をかけたらいいものか迷いつつも、聞かなければ進まない
ので、振り向いて尋ねてみると、待っていたという様な風体で、彼
はそう答えた。

……『裏界』。……聞いた事のない地名だな。

そもそも地名なのか？『界』という字は、高山の頂上付近や森の奥
深くみたいな、通常中々目にしない場所の事を指す場合に用いたり
する場合もあるが……。……
言い方も引つかかる。まるで……そう、まるで『今迄呼び名が存在
しなかったから付けた』様な言い方だった。

「ええ。それっぽく言うのであれば、『魔界』と言う事になるんで
しょうが」

「……『魔界』!？」

『魔界』………というと、アレか。伝説にある『魔物の本拠地』とい
うやつか。

馬鹿馬鹿しい……。……などと、普段は切って捨てるべき戯れ言なの
だろうが……。受け入れるしかあるまい。

たとえこいつが嘘を言っていたとしても、私にその真偽を確かめ
る事は出来ないのだ。

それが嘘である事を証明する根拠も、それが本当であるという証拠
も、今は何一つも持ち合わせていないのだ。

ならば、この男の言葉を受け入れるしかない。……疑うかどうかは、
また別の問題だ。

「……………解った。お前の言う通り、仮にここがその『裏界』……
だとする。それを如何に証明する？」

「証明ですか……難しいですねえ……というより、『裏界』ではな
いという前提で仰っていませんか？」

「当然だ。お前の言葉に対して一応の理解は示すが、『お前の言葉
が真実だ』と認めた訳では無い。ならば貴様の言葉を嘘とする立場
でものを考えるのが自然だ。話し合いで見極めを付ける為にはな」

「……………信用はするが信頼はしないってやつですか。……………それでいい
のです。貴女様はそれでいい」

「……………？」

私の答えが気に入ったのか、何故だかヤツは心なしか嬉しそうな声
色で、私を肯定する。

……………訳が解らない。「お前は信じるに値しない」と言われれば、呆
れるか憤るかのどちらかが普通だろうに。

「……………まあ、ここが『裏界』??以後は『魔界』で統一しまし
ようか。そちらの方が分かりやすくして良い」

「構わない。……………続けてくれ」

「ここが『魔界』だ、という事を証明するのは????正直面倒な
ので後回しです。信じようが信じられまいが、まだ支障はありませ
ん」

「……その言いぐさだと、ここがどこかというのは大して重要ではないと言っているのか？」

まだ、と言うからには、こいつの中には何かしらの段階……優先順位が存在し。

その優先順位は私にも当てはまる……と考えた方がいいか。そしてどうやらその優先順位の中で、ここにいる理由はともかく、ここがどんな土地かという情報は下位に入るようだな。

……やはりこいつは、私の事についても知らない風ではないようだ。……何者だ？

「ええ。知らずとも全く支障は無い……というほどではありませんが、あまり大きな意味を持つという訳ではありません」

「……解った。では聞こう????? 貴様、何者だ？」

「おや、自分の事では無く私の事を尋ねますか……成る程、考え無しではない様だ」

どうやらこいつは、次は私が私の事を尋ねてくると思っていたらしい。どこか感心したような目で見つめてくる。

……こいつの目には、私がそんなに切羽詰まっているように見えでもしたのだろうか……。

「……………が、少し甘い……………か。それを聞いてどうなるのです？ 貴女は」

「……………何？」

「私の正体を聞いてどうなるのですか、と聞いたのです。貴女の中に、私の正体と『貴女』との関係性を繋げる答えはありますか？ ……無い筈です。そして恐らく、貴女は『貴女』についての答えすら持ち合わせて居ない筈だ」

「……………」

やはり。

私の事を、こいつは知っている。確実に。それも、おそらくは1から10まで程には。

そして、私を試しているのだ。

さっきの私の答えは、どうやらお気に召さなかったらしく。

一つ前の問答では嬉しげだったのに対し、今回はどこか冷ややかだ。

……………なぜだろうか。今凄くイラツとした。

「己が誰なのか解らなければ？？考える土台がないのであれば、それを真っ先に作るべきだ。たとえそれが普段はもつとも愚かしいことであっても、それが無い時点で考えに意味はなくなるのですか」

「……………」

「……………とはいえ。目下一番の脅威について探ろうとするのは悪くは

ありません。同じような質問を繰り返さないのも、この場合は良い」

合格です、と。

そういつて、こいつは私に向かって、膝をついた?????はい?

え、ちょ……なんで?なんでいきなりそんな姿勢になるの?

なんでそんな、王を前にした家臣みみたいな姿勢をとるの?

「……はい?」

「先程までのご無礼、お許しを。我が主」

「……主い?」

なんだそれ。

ずっと敬語つかってきて、一瞬先生みたいに説教かましてきたと思
ったら、今度はうやうやしく「我が主」?

なにそれ意味が解らない。まったくもって解らないんだが!

……ただ、なんだろうか。

こいつが私に対して膝をつくというのは、何故だか当然だと思っ反
面、何故だか喜びを覚える光景だ。

……正直な話、嫌いじゃないな。

「ま、まあいい。許そう。?????だったらそれよりも。お前がこ
うして主だとする私は、何者だ?」

若干残ってしまった照れを振り払い、今迄で一番真剣に私は問いかけた。

私の正体。私が誰なのか。『こいつの正体』と『私の正体』、こいつがなぜ私を『主』とするのか、その答えを。

彼はゆっくりと顔を上げ、質問にこたえ？

「まあ、許して貰おうとは思っていませんでしたがね。質問にはお答えしましょう」

「んなっ!?!」

??えるかと思ったら、なにことも無かったかのようにして立ち上がり。

あまつさえ「あー埃がついちゃった」などと、膝を払いながらぬかしおった!

こいつ、私を舐めてるのか!?舐めているだろうコレはっ!?!絶対主だと思っただけだ!こいつ絶対私の事主だと思っただけだ!

私の抗議のまなざしを、こいつは華麗に無視した上で語り出した。

「貴女が何者なのか……それはごく解りやすい。ここは『魔界』? 『魔王』が居るとされる、魔物達の住処です」

「……………まさか?????」

……仮に。

ここが、本当にこいつの言う通りなのだとしたら。

ここが、本当に『魔界』なのだとしたら。

もしかして、私は?????

「……そのまさかです。貴女様はこの広大な魔界に君臨すべき偉大なる?????」「『魔物A』か!」「そう、『魔物A』!?????つて、え……?」

成る程成る程。私は魔物な訳だ。

そうすると、私が「あの一……」裸でここに居た説明もつく。

魔物は、服なんて着ないのだ。基本どいつもこいつも裸。

魔界にいるのも当たり前だ。「すいませーん……」なぜならばここは魔物の本拠地。

いても不思議じゃ無い、ていうか魔物がいなければ不思議だ!

そうか……生まれたばかりの「もしもーし、聞こえてますかー?」魔物というのはこういうものなのか……。

ある程度の知識はありながら、自己についての情報は持ち合わせていない。

なによりも、始めからある程度の大きさ、「はあ…………」成長を
しているというのも中々に興味深い。

ふむ……ならば次は何を主食とするのかも調べてみたいな。一説には大気中の魔力を少しずつ吸収しているので、食事は不要とも言われているが………どちらにせよ興味深い。

ではさっそく「良いから聞けッ! 考えに没頭するな駄目魔王ッッッ
!」~~~~~っ!?

み、耳がっ！？きーんとつんざくような残響が！！

「はあ……どうやら貴女様は自己に関しては驚くほどに過小評価する傾向にあるようだ。……いや、或いは先程の説教モードキで自信を喪失させてしまったか………?」

「~~~~~っ！！みみがっ、耳が~~~~~!!」

きーーーーんって！キーンってなってる！……うえっぶ、吐き気も催してき……おえ。

やばい、三半規管がやばい。主に耳からやばい。

「……お気を確かに。流石にやり過ぎましたか………?」

あ、何か耳を……というより側頭部を抱えられた様な感覚が。と思つたら、先程までの耳鳴りや頭痛、その他諸々が一瞬で収まった。……?

「あれ？なんともない………?」

さっきまであんなに痛かったのに。今は本当になんともない。一瞬で治つたみたいだ。……あれ？

「……はあ。驕らないのは美点ですが、過小評価過ぎるのは汚点です」

「……え？ああ、うん。ごめんなさい」

「……随分と素直……いやむしろ可愛げのある……それが貴女様の素ですか？」

「……はっ？！？？そ、そんな訳ないだろう！先程のは、その……アレだ！」

ええい笑うな！そんな微笑ましそうなものを見る様に微笑むなっ！
あといい加減に放せ！もういいだろう！？だからその……頬に手を添えるような形になっているから放せっ！

……んっ！思考変更、変更！考えを整理っ！落ち着け私！！
なんでもない、なんでもない、なんでもない！こいつの事はなんでもない！

……あ、あー………どうやら私は、『魔物A』という訳ではないようだ。

じゃあ『魔物B』か？というような馬鹿な問題ではあるまい。……
というか、何気にこいつ、なんか口調変わってなかったか？
そして何気に聞き捨てならない事を言っただけはなかったか？
えっと、確か………ま………ま………。

「ククク………魔王として、ではなく私個人としてならば、こちらの方が好ましい」

「え？う、うん……ありがとう………って、そっじゃなくて
?????魔王？」

「ええ、魔王です」

魔王？

「誰が？」

「貴女様が、です」

「魔王って、あの？」

「どの魔王かはイマイチ把握できませんが、おそらくはその魔王で
よろしいかと」

「あの、指パッチン一つで空や海や地を割るっていう、あの？」

「腕を振るえば空間を裂くとも言われていますね」

「……………ふむ。なるほど。私は魔王か」

「ええ、そうです。貴女様は魔王なのですよ」

「そしてお前は、私の僕」

「宰相でも側近でも將軍でも奴隷でも、なんともお呼び下さい」

「ふむ」

魔王、魔王……………私が魔王。

……………。

……………。

……………。

うむ。

「なるほど、嘘だな」

「いいえ、本当ですとも」

「……………証拠は？」

ひゃ、百歩譲っても、だ。

私が魔王だという証拠は、どこにある！？

私が魔王だと証明しうる何かがあれば、私は魔王ではあるまい！
そこ、百歩譲ってないと言わない！

「蹴り、です」

「……………は？」

「貴女様は私を素足で思いつき蹴り飛ばされました。ああいえ、それに対して怒っている、という訳ではないのです。むしろそれは私にとっては存在の証明、いわばご褒美です」

「……………はあ」

なんだこいつ。いきなりM宣言をしてきたのか？

「そういう訳ですので、おきになさらず。……………貴女様は私を蹴り飛ばしました。蹴られた私は、一体どうなりましたか？」

「……………綺麗なお星様に……………」

あれは初めて『ギャグ補正って、本当にあるんだな』と実感したときだった。

あんなに遠くに飛んで、見えなくなるなんて。

……………ん？

……………まさか。

どことなく嫌いな予感を覚えながらも、おそろおそろ目の前の男の顔を伺ってみる。

……………満面の笑みだ。

「気付いたか」って感じのオーラを醸し出す、私を褒めるような感じの満面の笑みだ!!

今の私には追い詰めるようなものとしか受け止められないけれど、確実に褒める笑みだコレ!

「気付きましたか。……ええ。そうです。普通人間の力では、あんなにも遠くまで人を蹴り飛ばすことはできません」

「……………」

「体感で20キロですか。流石ですね、その御力!」

ギャグ補正じゃなかったんだアレ!ちゃんとした現象だったんだ!

「……………あの」

「なんででしょうか。それと私に対してそのような態度は結構ですよ」

「……………その20キロっていうのは……………速度?距離?」

「距離ですが、何か?」

「……………そこはせめて、速度であって欲しかったなあ……………!」

自らの存在が魔王だと露見したきっかけが、怪力っていうのは……………正直どうなのだろうか。女の子的に。

こうして。

荒野の真ん中で真っ裸で佇んでいた元変態約二名の正体は。

どうやら、『魔王』と『その部下』らしかった。

「……………元気出せよ、な？」

「それがお前の本性か！？あとその顔止めろ、イライラする！」

あまりの事実には、私が膝をついて落ち込んでいると。

こいつは肩を叩きながら、やたらと馴れ馴れしく慰めてきた。とてもムカツク笑顔を浮かべながら。

?? 『魔王』と『その部下』? ……前者はともかく、後者は絶対に嘘だ！

……………ただ、この男に『魔王』と呼ばれて。

何の抵抗もなくその事実が胸に納まったのは、何故だろう。

|||||

3 『部下』

……………よし解った。

仮に。

仮に、だ。

私が所謂『魔王』だとしよう。

……私って、何をすればいいのだろうか。

ぼつんと荒野に真つ裸で佇んでいたのだ。荷物などはないだろう。

魔王らしく人間に対して戦争を挑む??にしても、今はこの『魔界』にいる訳で。

人間達が住む場所とここが、地続きであるかどうかすら解っていない現状では、動きがとれない。

地続きだったとして、どのくらいの距離があるのか。地続きじゃなかった場合はどうするのか。

というかそもそも魔王と言うぐらいなんだから、何かしらの便利な術を持っているはず。

瞬間移動とか転送とか、そんな感じの。もうこの際超長距離攻撃手段とかでも構わない。

ともかくとして、伝説に謡われる位の能力を、持ち合わせているはず????なのだが。

この身からは、なぜだがそういった『能力』的なものが、まったく感じられない。

見た目通りの力しか感じられないのだ。

見た目通りの、ごく普通の人間の女程度の力しか。

「腕力的な力だと、そこらの魔物よりも遙かに持ち合わせていますけどね。……普通の人間の女一（笑）」

「ええい笑うな!というか思考を読むな!」

ぼそりと呟き、クスクス笑う男に、私はそう突っ込まざるをえなかった。

あと何気に考えている事を読まないで欲しい。

「解りました、以後そうしましょう。……ああ、ちなみに私に『今後どのようにしたらよいか』等と言った意見を求めますと、好感度が下がりますよ」

「好感度！？なにそのゲームみたいなシステム！？」

「ちなみに今の私の好感度は53万です」

「意外と結構高い！？」

「もしも今回下がるとしたならば、100万下がります」

「あ、これただスケールが大きいだけだ！」

1ポイントとかじゃなくて基本『万』なんだなこれ！
でもそれでもその下げ幅はでかくない？オーバーキルだぞそれ！

「あー……ちなみに、好感度が0になったりしたら、どうなるの？」

「見捨てます」

「あっさりと死亡勧告を通知された！」

右も左も解らない今、見捨てられたら死ぬ！事実上の死亡宣告だ！やばい、好感度を下げる訳にはいかない！確か『今後の予定』云々を聞いたら下がるんだっけ？

……あれ？ていうか何？私になにか質問する流れになってる？何か聞かなきゃいけないの？いや、聞きたい事がない訳じゃあないんだよ？

ただ聞きたい事が多すぎるだけなんだよ？私ってどのくらいの事が出来るのかとか、私が存在する理由とか、こいつが存在する理由とか、その他諸々！

多すぎて何から聞けば良いのが解らないだけなんだよ？！そしてなんだかキャラが解らなくなってきたよ！

言葉遣いが最初の方と違ってきているよ！？どうしよう？！

「あ、ちなみにあと2秒以内に質問されなければ好感度が下がりますので」

「爆弾付きだった！」

駄目だ二秒とかもう無理だ何聞けば良いのか解らないっていうか自分が何をしたいのか解らないっていうか好感度下がるのは嫌だなーっていうか………ああああああああ！

「1………ぜい、今の私とさっきまでの私！どっちの方が好きですかっ………！」

何聞いてるんだ私！咄嗟にしても何聞いているんだ私！
なんで他人に自分のキャラについて聞いているんだ私っ！

……やばい、なんか恥ずかし過ぎて泣きそう。涙出て来た。

でも、聞いてしまった事は撤回しようがないので、ただ黙って見つめて、返答を待つ事にする。……恥ずかしいです。超恥ずかしいです。

……あれ、なんでこいつ鼻抑えてるんだろうか？なんであらぬ方向を向いているんだろうか。……こっち見るよ。不安になるだろ。

……そういえばさっきこいつ「こちらの方が好ましい」と言っただけか。そしてその前に『同じような質問は駄目』みたいな事を言っていたような……あれ？

これ、もしかして……詰んだ？終わった？

はははは。ウエルカム荒野の真ん中でのサバイバル生活。ウエルカム死のカウントダウン！

さようなら散々引っかき回しまくったあげくポイントと捨て去る鬼畜
外道変態野郎！

……その、服をもってきてくれたことについては……礼を言う。ありがとう。

「なんとという破壊力……！この娘、自分の容姿の使い方を熟知している……だと……！？涙目上目遣いでその質問は反則です？？？？忠誠心が200万程上がりましたよ……！！」

「……え？今なんて言ったの？小さくて聞こえなかった」

「なんでもありません。ええ、なんでもありませんとも……！！」

……なぜだろうか。今すつごく背筋がこう……ゾワツとなった。そしてよくよく見てみると、手で抑えているが、血が垂れてきているし。……大丈夫かこいつ。……
というかどうかなんだ。質問に対する答えも、質問の内容に対する評価も未だに答えてくれてないんだが。
なるべく早めに答えてくれないか。不安で押し潰されそうになるんだけど。

「……………あの、結局答えは、どうなんですか……………」

さっきからなんでちよくちよく敬語なんだ私。

「……………待てよ、敬語の魔王様というのも中々に……………」

なんで考え込むんだお前は。何を考えているんだお前は。そして何なんださっきから背筋に来るこの感覚は。

どこことなく、張り詰めているようで緩やかな？所謂『バカっぱいふいんき』（何故か変換出来ない）の元、そっぱを向いて（多分）口元から流れ出るを抑えながら考え込む自称魔王の部下と、それを恐らく涙目で見つめる私という、謎の空間が荒野のど真ん中で形成されていた。

なんだか恥ずかしくなってきた。誰かに見られる事はないだろうけど、見られたくはないな、この光景。

そんなこんなで。

なんだかんだでそんな光景が結構続いた。体感で10分くらい。流石に見上げるのも疲れたので、首の辺りを揉んでいると。

その場で俯きなにやらぶつぶつ呟きながらも、何事かを考えていた男は、突然顔を上げて。

「……………魔王様。以後私の事は?????犬とお呼び下さい……………」

ぶっ飛んだ発言を、かましてくれました。……………犬ウ?

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

4・『魔王の部下』、改め『魔王の犬』

草木の1本すら生えていない、ただただ広い荒野の真ん中で。

座り込む女に向かって、頭を差し出しながら『犬と呼べ』等という変態的要求をしてくる男が、そこにはいた。

女は『魔王』で、男はその『部下』だった。?????だった。

そう、『だった』。過去形だ。

先程まで男は、己が主となるであろう女性に対し、ほぼ一貫して傲岸不遜な態度を取り続けていた。

平たく言うと、ナメてかかっていた。

理由は単純明快。『出会ったばかりだったから』だ。

いくら自分がこの女性に尽くすことが定められているとはいえ、それは自分の意志で決めたことではない。

決められた事?? いわば運命なのだ。逆らいたくても逆らえない。それが解っていたからこそ、逆らえないからこそ、男は女にそのような態度をとったのだ。

それは主人となるであろう人物の人となりを知る為の行為で有り、ほんのささやかな嫌がらせでもあった。

そんな嫌がらせも絡めて、彼は『審査』を行った。

もつとも始めから嫌がらせや『審査』を行おうと考えていた訳では無く、最初は普通に仕え、普通に観察し、普通に評価しようと思っていた。

??が。彼は予定を変える事にした。その理由はまた後で語るとして。

彼女は、出会い頭に自分の事を『変態だ』と罵った。

そしてこちらが指摘するまで、彼女は自らの状態に気付かなかった。指摘され取り乱した女性を少しからかったら、それだけで蹴り飛ばされた?? これについては、自分でもデリカシーのない発言だったなとは思っているので、目を瞑ることにする。それにこれが嫌がらせをしようと思つた理由ではない。念の為?? のはどうでもいいとして。

その蹴りの力強さに、やはりこの方が、と己の主人であろう事を再確認し、ちよちよいと作つた服を手土産として持ち帰り。

謝罪しながらそれを渡し、彼女がそれを着るのを待って、ちよつとした問答?? 『審査』を始めた。

結果は『まあまあ』。

最初に考え無しの馬鹿、という訳では無いと解つた。それは実に良い事だ。

だが、自分を後にまわしがち?? 周りの事を先に考える傾向にある

とも解った。

これはあまりよろしくない。彼の主人となる『魔王』であるならば、度が過ぎるほどの自分本位であるべきだからだ。??と、いうのが普通の『部下』の意見なのだろうが。

『彼個人』としては、むしろ好ましかった。それでこそ、と思ったものだ。

以後の問答でも、満点とまではいかないが、それでも十分に合格と出来る答えを得る事が出来た。

??とまあこの様に、問答の結果だけに関しては『上々』だったのだ。

ならば、なぜ『まあまあ』なのか。

それは、彼女の性格??というより、言葉遣いが切っ掛けだった。

己の正体を一介の魔物などと思いつまむのも、まあ良しとした。

思考にふけり過ぎる性格も、問題ではあるがそこまで悪くは無い。

ただ????己を偽るのは頂けなかった。

彼女は普段は中性的、というか男の様な口調だが、とっさに口から出る言葉は、その外見に違わない少女らしい言葉。

それは、普段は意識して男の様な口調を使っているだけで、地は見ただ目通りのいたって普通の言葉遣いなのだという事を如実に表していた。

男は、それが気に入らなかつた。

『魔王』たるもの、己に忠実でなければならぬ??己を偽ってはならない。

本性が誰もが嫌う程の傲慢さをもっている、誰もが冷笑を浴びせる程に臆病だったとしても、それを偽ることだけはしてはならない。『魔王』は、如何に悪逆非道を尽くそうとも????『嘘』だけは、吐いてはならないのだ。

それが男の考えであり、それが男が女に対して『まあまあ』の評価

を下した、ただ一つの理由だった。

そういう訳で、彼は彼女の素の態度の方が好ましい、と漏らしたのだ。それは今はあまり関係無いが。

『まあまあ』と評価を下した男は、最後にちよつとした悪戯をする事にした。

『己が良いと思う質問をしなければ見捨てる』と言外に含み、問いを投げ掛けた。

勿論それはあくまでも冗談であり、しなくても見捨てるつもりはなかった????ただ、今後付き合っていくにあたって、若干態度を『厳しく』していくつもりではあったが。

そんな意地の悪い考えを持ち、内申ほくそ笑んでいた男に向かって、彼女は『先程までの自分と今の自分、どちらがより好ましいのか』と聞いてきた。?????こちらを涙目で見上げながら。

それを目にしたその瞬間、彼は『ぷつん』という、何かが切れる音を聞いた気がした。

そして同時に、胸に溢れそうな程の『何か』が、沸き上がってくる感覚を覚えた。

?????「何かが……いや、何かに目覚めた瞬間だった」と、後に彼は語る?????

なんだろうか、この……なんとも言えない感情は。

愛おしいではない、可愛らしいとも違う。そのようなものとは少々ベクトルが違う様な気がする。

ならば、なんなのだろうか。好きや嫌いとは違う、快不快とも違う。何かこう……自分の根源を刺激されるこの感覚……例えるならば、水を見ると飲みたいと思うような、そんな、欲望ともまた違った原

初の感覚……………。

ふと、そんな感覚を己にもたらした主の姿を再確認してみる。

……『去りゆく主人を寂しそうに見つめる犬』の姿を幻視した??
??鼻から熱い情熱がほとばしりそうになり、とつさに抑えてあらぬ方向を向いた。

……直視できない。なんなのだとつい横目で見て????気が付いた。

????『仕えたい』。そうか、私は仕えたいのか。

私はこの方の手となり足となり、体の一部となって主人の助けになりたいのか。

己が爪牙をもってして、主人の敵を蹴散らし、己の全てを駆使して主を支える。

そうやって最後まで、主人の傍で……例え傍に居られずとも、この身が朽ち果てるまで。

己の主人の血肉となる事を、私は望んでいるのか?????

それに気付いた時に、男の胸に去来したのは、先程までの己の所業を回想したことによる、途轍もない殺意と罪悪感だった。

??私は、なんとということ……ッ！ああ、もしも願いが叶うのであれば、先程までの自分を消し去ってしまいたい……！

しかしそれは叶わない。如何に過去の自分を亡き者にしたいと願っても、過去はなかった事にはできないのだ。

なによりも、己が敬愛する主人に、唾を吐くに等しい行いをしてしまったことは、忘れてはならないのだ。

ならば。

己が主人への、死に値する行為を行ってしまったのならば、
より一層、彼女への忠義を尽くそう。

見返りも何も求めない?? 求めてはいけない。
ただひたすらな、彼女への忠義を????。

そう固く決意した彼は、万感の想いを込めて。

「……………魔王様。以後私の事は???? 犬とお呼び下さい……………！」

そう、告げたのだ。

??それはあたかも、大罪人があさましくも、救いを乞い願うかの
如く。

「いやそういふことではなくて……嘘なの？」

「貴女様が望まれるのであれば」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3874ba/>

女魔王と男の話

2012年1月10日01時53分発行